

学校法人森教育学園 岡山学芸館高等学校 変化を必須化することで進化し続ける課題研究教材（岡山県）

実施体制の概要

- 全校生徒数：約1,300名
（うちSGH対象生徒 全体の6割程度）
- SGH対象学科：
進学コースを除く全科・コースの生徒
- HP：
<http://www.gakugeikan.ed.jp/>
- SGH委託費用総額：約4,030万円
（H27～R1：約680万円～約1,000万円）
- 校内の体制：SGH運営部として、4名のコアメンバーを中心に、
様々な教科から合計26名が参画。
- 国内連携機関：
岡山大学、特定非営利活動法人ハート・オブ・ゴールド、
Bio Energy Cambodia Corporation Co.,Ltd
- 連絡先
✉ info@gakugeikan.ed.jp
086-942-3864（代表）

何を目指したか

実社会に貢献できるグローバルリーダー育成を全校の文化、風土に

ツールのポイント

- 1 1年次の課題研究 の教材をオリジナルで開発。生徒に合わせた難度設定にこだわり毎年変更・改善を行うことを必須にし、変更を当たり前
- 2 現場の教員発案で課題探究を50分 / 週 100分 / 隔週へ

SGH事業実施に
必要だった資源

人員

■指定当初5名の教員で発足したSGH運営部が、最終年度には26名に拡大。教材はコアメンバーが作成、実施後は関係者全員で改善することを必須化、文理融合を含め、多様な立場からのフィードバック。



金銭

■主に海外研修費用と外部講師への謝金・交通費等へ充当。私学の独自性追求のために、法人から必要に応じて追加予算も捻出。



時間

■隔週授業のため授業がない週に運営部で教材のたたき台をつくり、授業の前日までに実際に授業を実施する教員との質問・対話を通して内容を確定。授業に向う教員のP D C Aサイクルを常に繰り返す。



心理

■毎回、毎年の改訂と、意識的に多くの教員に関わってもらうことを実践したことにより、全校に課題研究の学びの手法が風土として定着した。

Plan

ツール作成の背景

- SELHi指定など英語科を中心に牽引していた独自のグローバル教育を、全校的な文化、風土にしたいとの意志から、SGHを通してグローバル社会に貢献できるリーダー育成に着手。
- 海外との「交流」や「言語運用能力の向上」に留まらない教育手法の開発の必要性を感じていた。申請時に行った生徒向けアンケートから、グローバルリーダーに必要な資質として、「グローバルマインド」「問題解決能力」「交渉型コミュニケーション能力」「協働力」「実践力」の5つを設定し、この力（コンピテンシー）を養成するため、教材の独自開発に着手。
- SGH以前から継続的なネットワークがあったカンボジアをメインフィールドに、「開発途上国における貧困の悪循環を是正するために高校生が貢献できること」をテーマとした。学年進行により身につける資質を明確化したシラバスと教材を作成し、PBL(Project Based Learning)の手法を用いた教育プログラムを開発。海外フィールドワークは1年、2年の2回実施。自らの手で深く社会課題を探り、解決のための実践活動を担保できる内容とした。

Do

ツールの解説

✓ グローバル課題研究

取組概要

- 1年生が取り組む「グローバル課題研究」で用いる教材は、SGH運営部のコアメンバーを中心に完全オリジナルで作成している。1年次には、「社会を担うのは自分たちである」というマインドセットを作ることを重視している。2年次はPBL(Project Based Learning)の手法を用いて実施。
- 事業1年目に作成した教材は生徒の実態に対して難易度が高すぎたため、2年目に易化、3年目は再度難化させるなど、実践からの改善提案をもとに、毎年の改善を必須にしている。
- 2年生以降は、マイルストーンのみ決めただうえで、指導教員の自己裁量に基づく、生徒の自由な活動を重視した指導を行っている。自由度を担保するために各ゼミに対して研究予算も充当している。

✓ 100分隔週授業の実施

取組概要

- かつては50分・毎週の授業時間で課題研究の授業を行っていたが、議論の時間が十分に取れないとの現場の意見から、関係各所と調整し100分・隔週の授業に切り替えた。これにより十分にアクティブラーニングを展開することが可能となり、アウトプットを重視する授業の方針を実現した。

Check

取組内容の評価

- 「去年と同じことをして満足してはならない」という学校方針の基、不断の変化を追い求める姿勢が、教材が形骸化しない要因となっている。
- 教材の改善においては、SGH事業は5科コースの多様な生徒を対象としているため、「誰でも1回は発言できる」ということや、「いい意味で背伸びができるレベルの設定」を常に意識している。
- 目的意識を明確化させ、外部リソースに依存しすぎない教育活動が教育効果を最大化させたと認識。

Action

指定期間終了後のいま

- 生徒から「アウトプットへのフィードバックがもっと欲しい。」という意見があったことを受け、4年目以降は、生徒が考え続けられるようなファシリテーションが必要であるとの認識に立ち、「教員のファシリテーター化」というキーワードを意識して授業や研修を行いはじめています。
- 今までは「今」を考えさせる内容であったが、今年からは生徒が主体的に「未来」を考え「今」活動する教育活動の変化にチャレンジしている。